



総 括

鍋山 祥子（山口大学経済学部 教授）

今回、「シニアの社会貢献と世代間交流」というテーマで、仕事と子育ての両立支援にシニアがどのように関わることができるのかについて、質問紙調査とインタビュー調査の両面から研究を進められ、多くの成果が得られたと思います。

まず、保育園、学童保育、ファミリーサポートセンターの利用者への質問紙調査では、質問項目への回答はもちろんのこと、非常に多くの自由回答が寄せられ、そこからシニアの子育て支援への関わり方について、多くの示唆を得ることができました。

シニアの子育て支援の内容として望まれているのは、現状で親が確保している保育体制の「隙間」にあたる部分に対する支援、例えば、保育園や学童保育の時間外や休日の一時預かりや、登下校の見守りなどです。そして、シニアからの支援のあり方として求められているのは、シニアたちが持つ豊富な「知識や経験」と「安全」でした。同時に、その安全を担保するものとして多くの保護者から挙げられていたサービスの実施体制が、「個」ではなく「公」ということでした。つまり、一時預かりをしてもらうにしても、個人の家などの閉ざされた空間ではなく、公民館などの公の施設で、多くの人の目がある場所での実施が望ましいということです。また、支援をお願いするシニアについての希望が多かったのが、できれば顔見知りの方がいいということと、古くない、柔軟な考え方ができる方がいいということです。ここからは、子育て世代が持つ「シニア」のイメージ、例えば、シニア世代は自分の価値観を押しつける傾向にある、柔軟な対応ができない、などという思い込みを払拭する必要がある、ということです。そして、それには、シニアの側の「学び」と親とのコミュニケーションが重要なのです。これらの気付きを得られた今回の質問紙調査は、非常に貴重なものであったと評価できます。

次に、山口県下の保育園、学童保育、ファミリーサポートセンターに訪問し、シニアとの協働の現状と可能性について、直接インタビュー調査がおこなわれた結果、ほとんどの施設においてシニアとの交流が実施されていることがわかりました。

程度の差こそあれ、地域での世代間交流は、保育園や学童保育などの子育て支援機関では、既に進められていました。

その交流実践のなかから得られた意見としては、子どもに対してはもちろんのこと、シニア自身の安全にも配慮した活動を心がけて欲しいということと、子どもや子育て支援に関する知識を習得しておいて欲しいということでした。さらには、今後、シニアとの協働、特にシニアの経験を活かした子どもへの働きかけを積極的に進めていきたいという意向が多く述べられていました。

これらの調査結果から、これからシニアが子育て支援に関わっていく機会は増加する傾向にあり、その時にシニアに求められるのは、安全への配慮と「子育てについての知識の習得」だということが明らかになりました。

シニアが自主的に活動するアクティブシニアとなり、みずからの経験や知識を地域で活かすことによって、地域の子育てと子育て中の親の支援につながる。こうした、シニア世代の豊かなパワーを活かし、つなげることによって、私たちが暮らす地域のセーフティネットの網目が細くなり、暮らしやすさが創られていくのです。そして、今回の調査研究で重要なポイントとなっているのは、そのようなシニアと地域の人々とのつながりを模索しているのが、行政でも企業でもなく、シニア自身だということです。

地域のセーフティネットを埋めるためにシニアの力を活用するという方向からの働きかけではなく、シニア自身が地域で生き生きと動くことが、結果として地域を暮らしやすくする、という「シニア発」の発想だからこそ、そこには力強さと「ワクワク感」があるのです。

今回の調査研究を現状把握だけで終わらせるのではなく、地域に新たな一步を踏み出すための大きなきっかけになることを願いつつ、総括としたいと思います。

今回の調査研究に関わられたすべてのみなさまの笑顔を思い浮かべながらー。

今後の活動に向けて見えてきたこと

平成27年度（公財）山口きらめき財団調査研究委嘱事業による「シニアの社会貢献と地域コミュニティを豊かにする世代間交流のあり方」をテーマとして、聞き取り調査、アンケート調査を実施した結果、次の4つのあり方が見えてきました。

1. 子育て支援についての知識・スキルの習得

- (1) 子どもの発達段階に応じた関わり方。
- (2) 子どもを取り巻く環境について実情を学ぶ。（家庭・職場・地域）
- (3) 子育て支援プログラム実施における安全への配慮を学ぶ。

2. 安全・安心への配慮

- (1) シニアが心身ともに健康であること。
- (2) 子育て支援の場の環境を整えること。
- (3) 双方に対する保障の確保。
- (4) 緊急時の保護者及び関係機関との連携・連絡の確保。

3. 地域での顔の見える交流

- (1) シニアが地域の行事等（おまつり、運動会、ラジオ体操、ボランティア）に積極的に参加する。
- (2) 常に地域の子どもたちに声かけし、コミュニケーションを深める。
- (3) 地域の世代間交流事業を一緒に企画運営する。

4. 子育て支援のしくみ・体制

- (1) 公民館、集会所、公会堂等の場の確保が必要。
- (2) 自治会、団体、有志と連携した活動を行う。
- (3) 学習体験を積んだコーディネーターの確保。（シニア対応）
- (4) 運営資金の確保。
- (5) 運営に当たっての約束事、ルールを決める。

～「やまぐちネットワークエコー」がめざすこと～

1. 会員一人ひとりが積極的に社会貢献に関わる。
2. 志縁のネットワークを広げ、他団体とも連携する。
3. 常に時代の動きを読み取り、課題解決に向けた社会活動キャリアを高める。
4. 女性の活躍促進への支援をしていく。

◎ 取材者及びアンケート集計者 ◎

岡野芳子	金折美津子	国廣真由美	桑原芳晴	幸坂美彦
重田強子	高木チエ子	俵田秀子	徳光康美	西村久美子
西山香代子	西山京子	橋本芙由子	林園代	原田浩
原田雅代	藤田千勢	藤本米子	益田徳子	松田洋子
村上靖子	吉富崇子	吉光智恵		(五十音順)